２０２４年　4月　12日

研究休暇報告書

南山大学長
ロバート・キサラ　殿

所　属　南山宗教文化研究所

職氏名　第一種研究所員　金　承哲

受入研究機関：天主教輔仁大学（Fu Jen Catholic University）
期間：２０２３年4月1日―２０２４年3月３１日
目的：「文学的神学」の可能性についての研究

１．研究の背景と目的

私は、これまでキリスト教と仏教との対話、キリスト教と自然科学との対話、そしてキリスト教文学にまつわる研究に従事してきた。これら一連の諸研究は、宗教が多元化され自然科学の世界観に大きな影響を受けている現代社会において、これからのキリスト教神学の可能性を考えるための試みであったと言える。その具体的な成果としては「ヒューマン・クローニング」をめぐる神学的論争に関する研究成果をまとめた『神と遺伝子：遺伝子工学時代におけるキリスト教』（東京：教文館、2009 年）があり、また直近では *The Center is Everywhere: Christianity in Dialogue with Religion and Science*、Eugene: Pickwick Publication, 2022）において、１９世紀末以来、キリスト教の自己理解のための最も重要な解釈学的状況になっている「宗教と科学」とキリスト教の対話について研究した。

こうした一連の研究活動及び問題意識を踏まえて、私は宗教と科学との対話――具体的にはアジアの仏教思想と生物科学との対話――によって形成されるキリスト教神学の内容が、どのような「表現」の方式及びどのような「文体」を要求するのか、という神学的な問いに答えることを次の研究目標とした。従来から多くの研究者が語ってきたように、哲学や神学が語る内容はそれを表現するに最も相応しい形式や文体を要求するからである。「内容」と「表現」（文体）は不可分離の関係にあり、より積極的に述べるならば、「内容」は「表現」されることによって初めて「内容」となり得る。つまり、ある意味では「（思想）の内

容は（文の）外側にあり、文体こそ文の内側にある」とも言える（Susan Sontag, “On Style”）。本研究活動は、これまでの研究で検討してきた神学的「内容」をそれに最も相応しく「表現」するための次なる模索であると言える。

こうした研究のために、私は近来一連の中国語圏の諸文学研究者（主には台湾の陳世驤、高友工、柯慶明、鄭毓瑜、王德威、陳國球の諸氏）を中心として議論されてきた、アジア及び中国文学史における「抒情伝統論」の研究に注目した。「抒情伝統論」とは、抒情文学こそ中国の文学の基底を流れる根本精神と考える主張である。これは近代になって流入してきた欧米の浪漫主義に触発されて生まれたというべき特徴を色濃く残したもので、まさに東西の文学的伝統及び思想が交差した結果生まれた理論であると言える。そのため、欧米由来のキリスト教のアジア的受容の可能性を論じるにあたって、貴重な示唆を数多く含む研究対象である。私は既に日本のカトリック作家遠藤周作について研究した成果としてまとめた『遠藤周作と探偵小説――痕跡と追跡の文学』（南山大学学術叢書）（東京：教文館、2019年）を通じて、キリスト教がどのようにして日本という土壌に根を下ろすことができるかについて論証を取り組んでおり、この活動が本研究計画の重要な土台となっている。

２．研究休暇中の研究活動の内容

研究休暇中は、天主教輔仁大学（台湾・新北市所在）社会科学院宗教学科にて研究を行った。

（１）輔仁大学の図書館や台湾国内の諸図書館を利用して研究テーマと関連する資料を探索・収集した。

（２）輔仁大学や台湾国立大学、そして中央研究院（Academia Sinica）で中国文学、仏教文学及び宗教間対話を専門とする研究者らとの交流を行い、彼らが主催する研究会に出席し、時には研究発表を行った。

３．研究成果とその発表

上記のような研究活動に基づいて研究論文を執筆することができた。（“Of God and the Lyrical: On the Meaning of ‘The Lyrical Tradition’ of Chinese Literature for the Theology of Dialogue with Buddhism and Science）

以上、ご報告とともに、一年間の研究休暇をいただき心より感謝を申し上げます。この研究を今後の研究・教育に生かしていく所存です。